

## 最小2乗法に関する公式の導出

---

ここでは、直線や平面を求める代表的な方法である線形最小2乗推定問題を考えます。

直線の方程式は、

$$ax + by + c = 0 \quad (1)$$

円の方程式は、

$$x^2 + y^2 + ax + by + c = 0 \quad (2)$$

平面の方程式は、

$$ax + by + cz + d = 0 \quad (3)$$

で表されます。

これらは各々、

$$(a \ b) \begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix} = -c \quad (4)$$

$$(a \ b \ c) \begin{pmatrix} x \\ y \\ 1 \end{pmatrix} = -(x^2 + y^2) \quad (5)$$

$$(a \ b \ c) \begin{pmatrix} x \\ y \\ z \end{pmatrix} = -d \quad (6)$$

と表すことができます。

これらの式において最小2乗法で求めたいのは  $a$  や  $b$ 、それに  $c$  なので各々を以下のように変形します。

$$(x \ y) \begin{pmatrix} a \\ b \end{pmatrix} = -c \quad (7)$$

$$(x \ y \ 1) \begin{pmatrix} a \\ b \\ c \end{pmatrix} = -(x^2 + y^2) \quad (8)$$

$$(x \ y \ z) \begin{pmatrix} a \\ b \\ c \end{pmatrix} = -d \quad (9)$$

これらは全て

$$A \cdot \vec{x} = \vec{c} \quad (10)$$

と表すことができます。

よってこれは、 $A \cdot \vec{x} = \vec{c}$  における固有値が1の時の固有ベクトル  $\vec{x}$  を求める問題に帰着されます (図2・図3参照)。

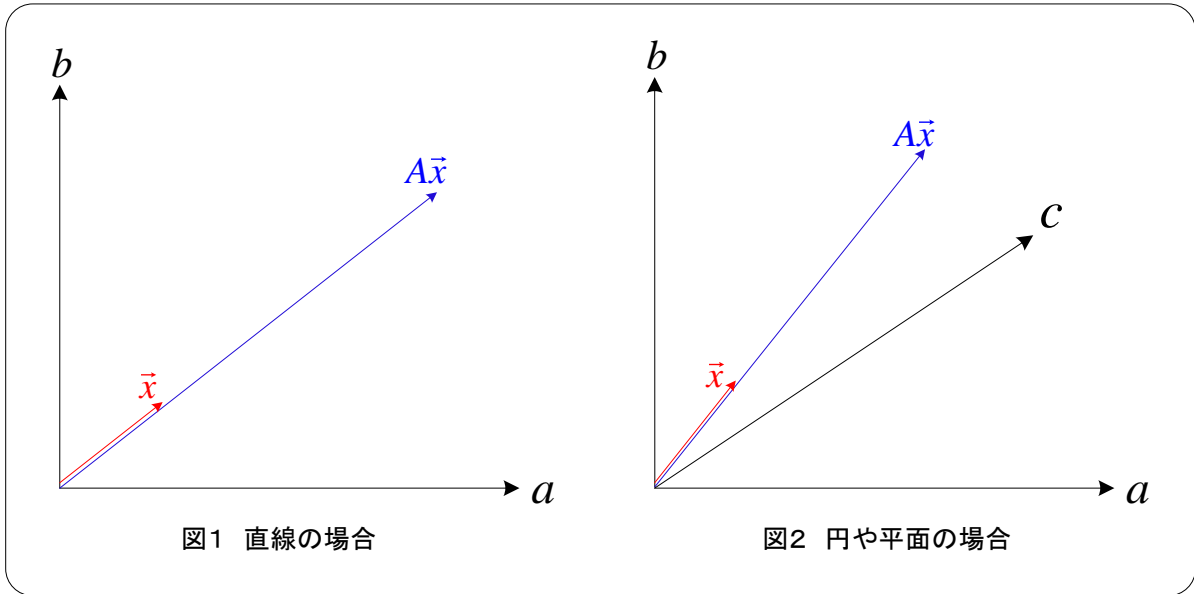


図1 直線の場合

図2 円や平面の場合

以下、 $\vec{x}$ を求めましょう。

まず、残差 $R$ を下式で定義します。

$$R = \|A \cdot \vec{x} - \vec{c}\|^2 \tag{11}$$

この式は、

$$\begin{aligned} R &= (A \cdot \vec{x} - \vec{c})^T \cdot (A \cdot \vec{x} - \vec{c}) \\ &= ((A \cdot \vec{x})^T - \vec{c}^T) \cdot (A \cdot \vec{x} - \vec{c}) \\ &= (\vec{x}^T \cdot A^T - \vec{c}^T) \cdot (A \cdot \vec{x} - \vec{c}) \\ &= \vec{x}^T \cdot A^T \cdot A \cdot \vec{x} - \vec{x}^T \cdot A^T \cdot \vec{c} - \vec{c}^T \cdot A \cdot \vec{x} + \vec{c}^T \cdot \vec{c} \\ &= \vec{x}^T \cdot A^T \cdot A \cdot \vec{x} - \vec{x}^T \cdot A^T \cdot \vec{c} - \vec{x}^T \cdot (\vec{c}^T \cdot A)^T + \vec{c}^T \cdot \vec{c} \\ &= \vec{x}^T \cdot A^T \cdot A \cdot \vec{x} - \vec{x}^T \cdot A^T \cdot \vec{c} - \vec{x}^T \cdot A^T \cdot \vec{c} + \vec{c}^T \cdot \vec{c} \end{aligned} \tag{12}$$

と展開できますので、 $\vec{x}$ で微分すると、

$$\begin{aligned} \frac{\partial R}{\partial \vec{x}} &= A^T \cdot A \cdot \vec{x} + A^T \cdot A \cdot \vec{x} - A^T \cdot \vec{c} - A^T \cdot \vec{c} \\ &= 2 \cdot (A^T \cdot A \cdot \vec{x} - A^T \cdot \vec{c}) \end{aligned} \tag{13}$$

となります。ここで、 $R$ を極小化する $\vec{x}$ を求めるため、

$$\frac{\partial R}{\partial \vec{x}} = \vec{0} \tag{14}$$

の性質を考慮すると、

$$2 \cdot (A^T \cdot A \cdot \vec{x} - A^T \cdot \vec{c}) = 0 \tag{15}$$

ですから、

$$\bar{x} = (A^T \cdot A)^{-1} \cdot A^T \cdot \bar{c} \quad (16)$$

が得られます。

ここで、

$$B = (A^T \cdot A)^{-1} \cdot A^T \quad (17)$$

と置きます。

もし  $A$  が正方行列ならば  $A \cdot \bar{x} = \bar{c}$  から

$$\bar{x} = A^{-1} \cdot \bar{c} \quad (18)$$

と計算できますので、

$$B = A^{-1} \quad (19)$$

となります。

$A$  が非正方行列の場合はこのようにはできませんが、概念的にはその延長線上にあると考えます。つまり、 $B$  を非正方行列の逆行列のように考えることで抽象化を図ります。このことから  $B$  を一般逆行列と称しています。

以上